京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

2024年　7月　1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　藤　　洋 作　様

所属部局・研究科　文学研究科

職 名・学 年　　博士後期課程 2年

氏　　名　　平井 尚生

助成の種類	**令和6年度　・　国際研究集会発表助成**		
研究集会名	第33回国際ヴァージニア・ウルフ会議		
発表形式	□ 招待　・　■ 口頭　・　□ ポスター　・　□ その他(		
発表題目	Woolf's Aerial Imagination and the 1920s aviation technology in "Flying Over London"		
開催場所	アメリカ合衆国カリフォルニア州フレズノ市、カリフォルニア州立大学フレズノ校		
渡航期間	2024年　6月　4日　～　2024年　6月　11日		
成果の概要	**タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　■ 無　□ 有(　　)**		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	費目	金額(円)
		航空運賃	214,200
		宿泊費	59,922
		滞在費	21,000
		学会参加費	47,035
		その他	7,843
		以上に助成金を充当	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 採択後、迅速にお振り込みいただき大変助かりました。申請・報告の手続きが比較的簡便であることも有難いです。誠にありがとうございました。		

成果の概要／平井尚生

私は 2024 年 6 月 4 日から 11 日にかけてアメリカ合衆国へ渡航し、カリフォルニア州立大学フレズノ校にて開催された第 33 回国際ヴァージニア・ウルフ会議（33rd Annual International Conference on Virginia Woolf）で研究発表を行なった。会議は、「ウルフ、モダニティ、テクノロジー」（Woolf, Modernity, Technology）をテーマに、6 月 6 日〜9 日（現地時間）の 4 日間開催された。大規模言語モデルの急速な普及を筆頭に、ここ数年で大きく変化する現代社会のテクノロジー環境を背景に、ヴァージニア・ウルフとその作品とテクノロジーの関わりについて連日活発な議論が交わされた。

会議は、主にパネル、ワークショップ、基調講演の 3 つに加えて、夜などに開催される様々なアクティビティによって構成されていた。パネルでは、3〜4 人の研究者がまずそれぞれの研究発表を行い、続いてフロア参加者を交えてディスカッションが行われた。ワークショップでは、企画者の提示するテーマに基づいた参加者の意見交流が行われるが、企画者の裁量が大きく、様々な内容・形式で実施されていたようだった。

とりわけ、初日の午前中に開催されたワークショップ “How Else Should One Read Woolf?” は、テクストの多言語への翻訳をテーマに、企画者 Maria Rita Drumond Viana 氏が提示したウルフのテクストの抜粋を、参加者同士で小グループに分かれてディスカッションしながら、様々な言語へ翻訳するという実践的な活動が行われた。私の参加したグループのメンバーは、それぞれ日本語・英語・トルコ語を母語としており、英語ネイティブスピーカーならではの感覚、トルコ語特有の特徴からの視点など、一つのテクストを多角的に捉えることができる興味深いセッションだった。その他のグループでは、フランス語、イタリア語、ポルトガル語、タガログ語、韓国語などへの翻訳が行われており、ウルフ文学のグローバルな広がりを実感できた時間でもあった。

私は最終日の午前のパネルで発表を行なった。“Spatial Activation: Sky, Stage & Page”と題されたこのパネルはグラーツ大学の Cecilia Servatius 氏が司会を務め、私を含めた総勢 4 名が発表した。
まず、サイモンフレーザー大学の Mark Deggan 氏が、‘“The valediction of the gramophone’: Theatricality & the Machine Age — *Between the Acts*” の題で、ウルフの遺作『幕間』における演劇と機械のモチーフについて発表した。次いで、カリフォルニア大学ロサンジェルス校の Elizabeth Crawford 氏が、‘“A Compact of Whiteness’: Air in Woolf as Virtual Space”の題で、ウルフ作品における「大気」を効果的に用いた非人称的な語りを分析した。開催校の院生である Elizabeth Cardenas 氏は、“The Presence of the New Woman in Virginia Woolf’s *The Years*”と題して、『歳月』において、ヴィクトリア朝的性規範を脱却しようとする「新しい女性」の表象に、フェミニズムの観点から考察を行なった。最後に私が発表を行い、架空の飛行体験を描くウルフのエッセイ「ロンドン上空」を、同時代の航空テクノロジーとその文化的コンテクストから分析することで、当時の最新鋭の技術である飛行機に対してウルフがどのようにアプローチしたのかについて報告を行った。四発表の終了後には、フロアからの質疑応答が行われ、充実した議論が展開された。特に、私と Crawford 氏の発表が、いずれも「ロンドン上空」を分析対象に含んでいたため、双方の発表について意見交換を行うことができた。Crawford 氏とは、パネル終了後に今後も研究交流を続けていくことを確認し、貴重な知遇を得ることができた。氏は、ウルフおよび同時代の女性作家における「大気」を主題とする博士論文を本年中に完成させる予定とのことであった。

また、社交と意見交換の機会は頻繁に設けられており、ウルフと文学のみならず、研究者としてのキャリアなども含めた幅広い話題について、世界中の参加者と交流することができた。本会議は、参加者数、日数、内容の充実度すべて国内の学会では、類を見ない規模であり、国際学会で発表することの重要性を実感した。本会議に参加したことで、現在の研究について重要な知見を多数得られたのみならず、今後研究者として活動を行っていくにあたって、貴重な経験を得ることができた。